

「介護されるくらいなら死んだ方がマシだ」

「そこまでして老人を介護すべきかを考える」

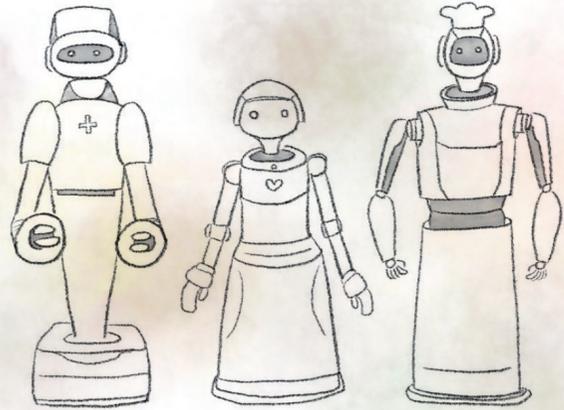
この世の中は介護に対するネガティブイメージがある。

20年後の集合住宅でこのイメージを払拭する。

介護は精神面と肉体系の双方で助ける必要がある。その担い手が人間のみに  
なっているから負担が大きく感じるのではないか。

# 踊り出す踊り場

- 人間とロボットが共生する社会 -



## 超高齢化社会におけるロボットとの共生

20年後、団塊世代は90代を迎え、要介護者が増加する。

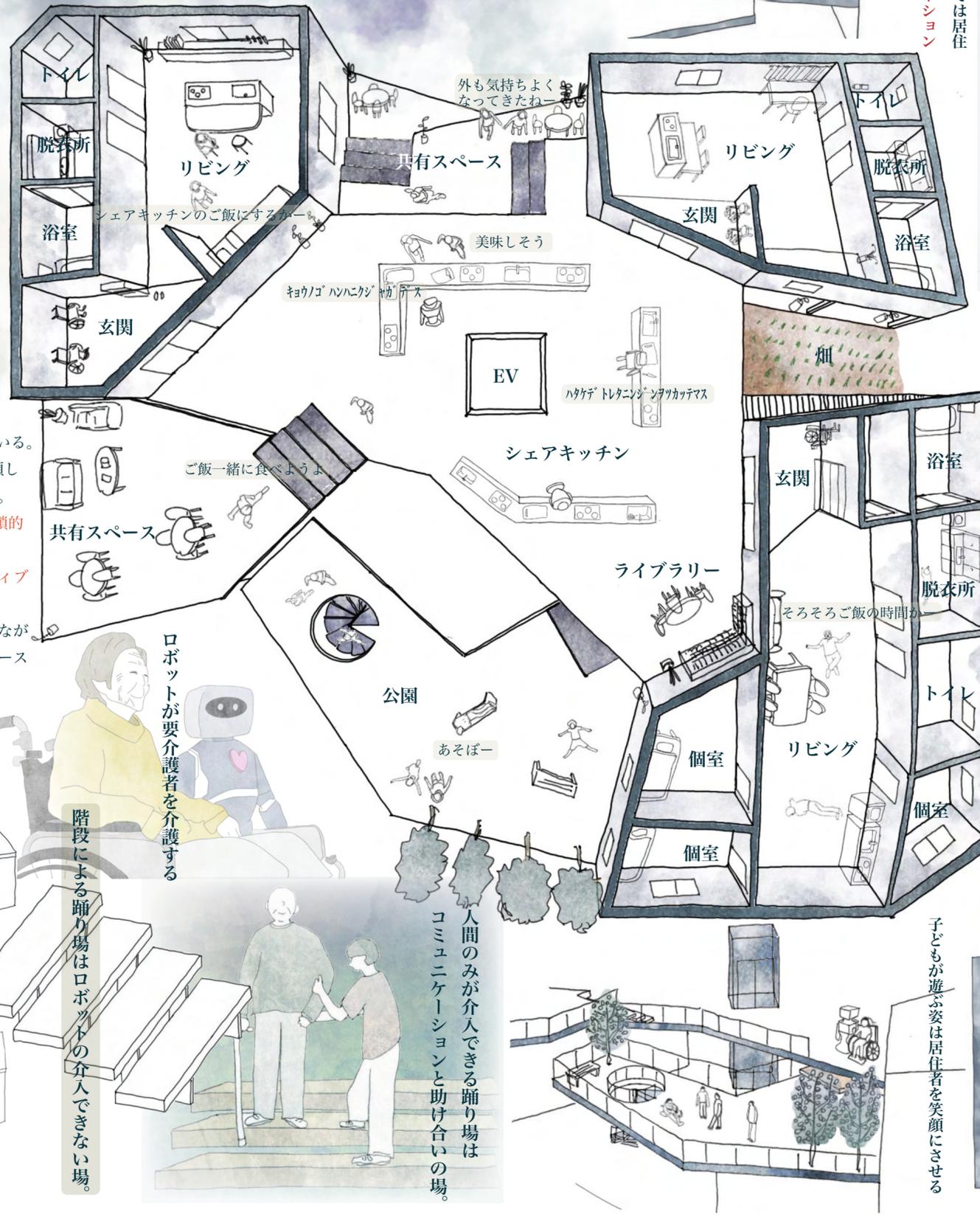
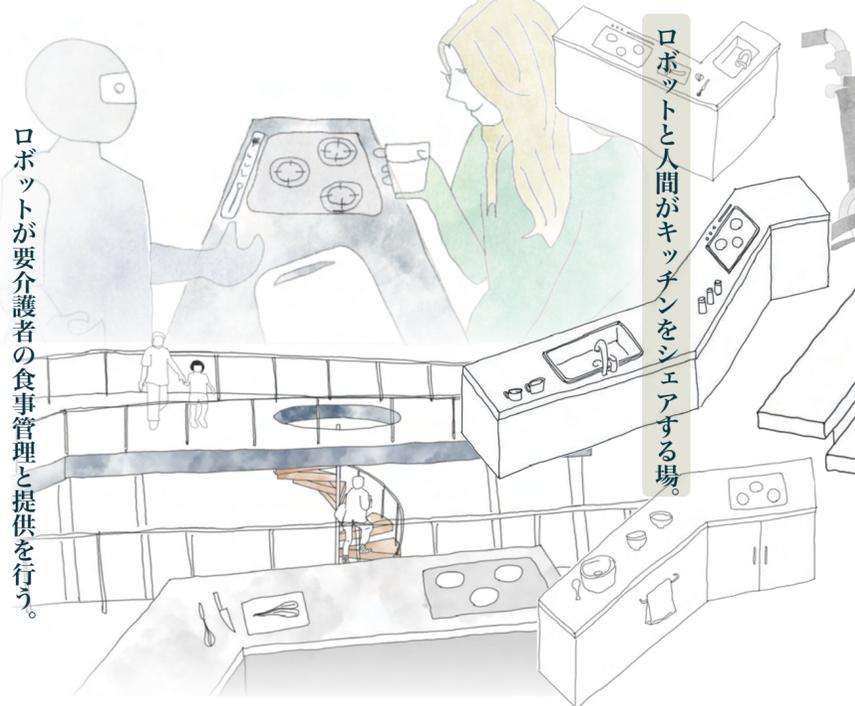
現在、ヤングケアラーや老老介護、介護施設の人材不足などの介護問題が深刻化している。

しかし、20年後、介護ロボットの誕生と普及により、ロボットがケアラーとして台頭して  
いく。ロボットが台頭したことによって、要介護者と人間との関わりが少なくなる。

現在から20年後までで介護施設は閉鎖的で、学校や職場もリモートワークにより閉鎖的  
になるだろう。

人間とロボットが対等な関係であることを前提に、この集合住宅が介護というネガティブ  
イメージを払拭する基点になることをこの設計の目標とする。

リモートワークにより働く場所を選ばなくなり、ロボットによる介護の手助けを受けなが  
ら家族揃って暮らすことができるようになるだろう。住戸の延長線のような共有スペース  
を設けることで、閉鎖的になりがちな集合住宅を開き、ロボットとの共生を目指す。



ロボットが要介護者を介護する

階段による踊り場はロボットの介入できない場。

人間のみが介入できる踊り場は  
コミュニケーションと助け合いの場

子どもが遊ぶ姿は居住者を笑顔にさせる

屋根から滴る雨水が畑を潤す

現在

畑で作った作物をシェアキッチンで利用する

20年後

